

紹介

『箕面市史 史料編一・二』

勝尾寺文書

現在、大阪府下へのこされた最大の中世文書である勝尾寺文書が『箕面市史、史料編一・二』として公刊された。この勝尾寺文書はかつて、昭和六年に大阪府史蹟名勝天然記念物保存調査会からその一部が公刊されていたが、その収載文書はほぼ全体の半分であって、勝尾寺文書のすべてをおおっておらず全文書の公刊が久しく待望されていた。

応頂山勝尾寺（箕面市大字粟生）は平安時代に「聖の住所」として『梁塵秘抄』にもうたわれた北摂の代表的な中世山間寺院である。ここに所蔵される勝尾寺文書は一九三点であって、この寺院の中世の発展の種々相を伝えている。とくに山林修行の行者の山として出発した勝尾寺が、やがて比叡山の白川浄土寺門跡に属して、摂津国

総持寺の別院としてあらわれ、寛喜年間に山堺相論を通じて、寺領四至の領有を確実にしていった平安・鎌倉時代の事情、あるいはまた、上の四至をこえて、周辺の外山・高山・真河原の三カ荘に対する支配権をのばし、浄土寺門跡雑掌との争いをつづけ、さらに北条氏滅亡の混乱に乗じて大塔宮令旨をえ、この三カ庄を奪取、さらにまた足利尊氏から高山庄地領職の寄進をうけ、漸次寺領支配を拡大していく鎌倉末、南北朝期の歴史、あるいはまた、この高山荘に拠点をおいて成長をとげていった戦国大名高山氏との所領支配をめぐる興味ある事情の展開というように、本文書は勝尾寺をめぐる北摂地方の多彩な歴史を生き生きと伝えている。

今回の『箕面市史』への収載にさいし、勝尾寺文書は二つに分けられ、平安時代から鎌倉時代末の元弘年間にあたる部分が『史料編一』に、同じく南北朝・室町・戦国時代に関する部分が『史料編二』におさめられた。後者は勝尾寺とならんで「聖の住所」として知られた滝安寺（箕面寺）の

文書があわせて収録されている。余談になるが近年、毎年夏になると、恒例のように中世史サマー・セミナリーがおこなわれている。勝尾寺は十年ばかり以前にその第一回の会場となった。その第一回サマー・セミナリーの際、全国の数多くの中世史研究者が、今回の市史の校訂者である戸田芳実氏の解説で現地でしたしく文書の現物に接している。

それに参加しておられた方はよく御存知であるが、現在の勝尾寺文書は江戸時代の内容別に整理分類され、六十七巻の卷子に仕立てて保存されている。その分類は

- (子) 縁起巻六巻
- (丑) 寺領山林巻二〇巻
- (寅) 寄進状巻一七巻
- (卯) 田島壳券巻三巻
- (辰) 離書巻九巻
- (巳) 寺法書巻三巻
- (午) 公家武家并所々当寺記之状類巻一卷
- (未) 東寺官符令旨并棟別銭書状巻一卷
- (申) 異国降伏之御教書施行遵行巻一卷
- (西) 如法経奉加帳巻二巻

(戊) 勝尾寺常行三味堂過去帳巻二巻

(亥) 請雨作法書巻一卷

(甲) 要脚錢請取状巻一卷

(乙) 御壁書并触書状巻一卷

である。この分類をみていただければわかるように文書の内容は、政治史社会経済史、文化史、宗教史等々、まことに多方面にわたっている。中世文書のあらゆる領域をおおう豊富さがただちに納得されるであろう。

このような内容別分類による卷子仕立てはすでに延宝九年の勝尾寺文書の「類聚目錄」にみえている。おそらく、このときに卷子に仕立てられ、同時に検索の便のために「類聚目錄」が作成され、以後、大切に保存されてきたものであろう。

ところで、今回の史料編への収載にさいしては、卷子仕立ての現状によらず、文書はすべて編年順に整理しなおされている。時代順に歴史を過観するにはどうしてもこの編年順にたよらねばならぬ。これが一番

便利だからである。ただ編年順は内容的に連関する文書群がばらばらになってかえってみにくいという欠陥もある。その欠陥を

おぎなうために今回の『史料編』には文書一点ごとに卷子の分類番号を付した上、巻頭に延宝の「類聚目錄」を付載して、関連文書の検索に便をはかっている。利用者にとってはありがたい配慮である。それから巻末には、『史料編』の地名索引が付せられている。これも読者には便利である。

(A5判 四五一頁 一九七三年三月 筑面市役所)

(大山喬平・京都大学助教授)

## 稲垣泰彦編

### 『莊園の世界』

戦前・戦後を通じて豊富な研究史を持つ

莊園研究が、実証的にも理論的にも一定の成果をあげて来たことは、誰しも認める所である。一方、歴史教育に携わる人々をはじめとして、莊園を専門としない研究者からも、莊園を教えることのむづかしさ、そのとらえ所のなさを指摘する声が聞かれる。従来の莊園研究を支えて来た思想と方法が

問われる段階にきているようである。

かかる現状を打破するために、莊園研究者が第一歩を踏み出した成果が、本書であるといえよう。編者の稲垣氏は、「一定の事件や事象に焦点を合せ、……その舞台となった莊園の立地条件や景観と、そこに営まれた人々の生活の姿を、具体的に生き生きとえがきだ」すことが、著者の共通の目標であると述べておられる。

池田莊遺跡をはじめとする中世遺跡保存問題が緊急な課題となっている現在、かかる方法をとる本書の企画は、時宜にかなうものといえよう。なぜなら、一連の保存運動を経て、遺跡保存の決定権は、地域住民にあるという原則が確認されつつあるからである。

前書はこの位にして、内容の紹介に移る。

稲垣泰彦「莊園開発のあとをさぐる―大和国池田荘―」綿密な現地調査にもとづき開発に利用された用水の確定、豪族屋敷を有する池田郷の復原がなされ、延久から文治の間に行われた均等名編成の問題にも触れる。